



秋の気候とアジサイの開花について

春山 純平

アジサイは、翌春の開花に向けて秋から花芽分化が始まります。しかし、近年は秋の高温によって分化の遅れや未分化のまま冬を迎える株が発生し問題となっています。

今回は、令和6年の秋の温度推移とアジサイをしっかりと開花させるための秋からの栽培管理について紹介します。

1. アジサイの花芽形成メカニズム

アジサイは図1のような流れで生育します。夏季は気温が25℃以上で花芽分化が抑制されており、秋に18℃を下回るようになると花芽分化を開始します。そして冬季に5℃を下回ると休眠に入ります。休眠中の株は生育適温でも生育を開始せず、5℃以下の低温に一定時間遭遇し休眠が打破された後適温になると生育を再開し開花します。

花芽分化の開始時期は気象条件、摘心時期、株の栄養条件、品種などによって異なります。表1は花芽分化に必要な適温域(18～5℃)遭遇時間による品種の分類です。500時間程度で十分な品種もあれば、900時間以上必要な品種もあります。

2. 令和6年の気象状況

図2は令和5年と令和6年の日平均気温の推移、図3は花芽分化適温域(18～5℃)遭遇時間を表しています(それぞれ伊良湖のアメダ

スデータから作成)。令和6年は令和5年と比べて気温が下がり始めるのが遅く、平均気温が18℃を初めて下回った日が20日遅くなっています。また花芽分化適温域遭遇時間の充足時期も2週間程度遅れています。このことが、令和7年開花作での開花遅れや花とびに繋がったと考えられます。

3. 秋の栽培管理の注意点

(1) 花芽分化適温の確保

栽培環境が適温域(18～5℃)になる時間を多くすることが重要です。そのためには、ネットハウスの利用、頭上かん水、風通しの確保などの昼温、夜温を下げる工夫が必要です。

(2) 施肥管理

アジサイは花芽分化期の直前(9～10月)に施肥を行います、施肥

量が多すぎると休眠期に落葉せず、花芽分化が遅れたり、株の耐病性が低下したりします。緩効性被覆肥料を3.5号鉢あたり鉢土面に2～4gを目安に、自身の栽培環境や品種特性を考慮した施肥が必要です。

(3) 検鏡

3月出荷では冷蔵庫により強制的に休眠を打破しますが、冷蔵開始までの花芽分化が不十分だったり冷蔵期間が短すぎたりすると花芽の発達障害や開花の遅れ、茎の伸長不良につながります。特に秋が高温の年は分化が遅れがちになるため、冷蔵庫に入れる前に生長点をルーペ等で観察する「検鏡」を行い花芽が育っていることを確認し、十分な期間(5℃で40日以上)低温に当てることが重要です。

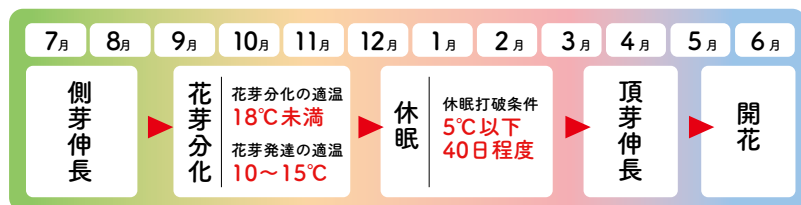


図1 アジサイの生育ステージの流れ

表1 花芽分化に必要な適温域(18～5℃)遭遇時間による品種の分類

花芽分化適温遭遇時間	該当品種
120時間以下	九重の桜
121時間から530時間	歌合せ、小町、ダンスパーティー、ハッピー、ひな祭り、フェアリーアイ、星の桜、アデラ、カーリースパークル、カステリン、コットンキャンディー、ディープパール、ブラックダイヤモンドエンジェル、マジカルグリーンファイヤー
531時間から900時間	城ヶ崎、卑弥呼、アフタヌンドリーム、ハワイアンピンク
901時間以上	ハワイアンファーストレディー、ピンクダイヤモンド、ピンクデライト、ボージブーケメアリー、ミセスクミコ

*愛知県農業総合試験場研究報告第56号 「鉢植えアジサイにおける花芽分化開始時期の品種間差異」より引用

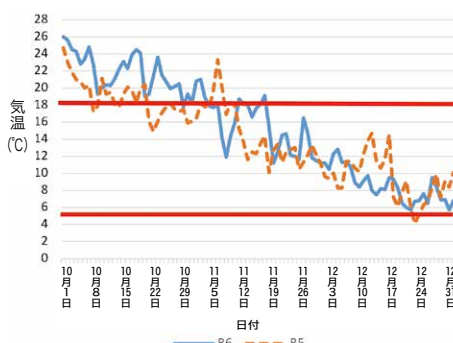


図2 令和6年と令和5年の日平均気温の推移

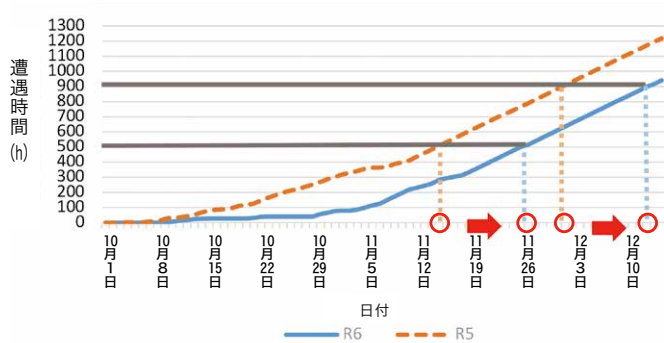


図3 令和6年と令和5年の花芽分化適温域(18～5℃)遭遇時間